# 私達の道～選ぶ道は...～

時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私達の道～選ぶ道は・・・～

【Ｎコード】
Ｎ４３４８Ｉ

【作者名】
時雨

【あらすじ】
クラスの空気的な存在の女の子「鮎川美帆」がクラスの人気者の「神城夕」が、話し掛ける二人の出会い（？）から始まる。
夕の一言一言にムカついていた美帆だが・・・？

## プロローグ（前書き）

えっと…これは、実話を元に書いています。
私が体験した話です。
特に注意点は有りませんが、見たら何か書いてください。

# プロローグ

～お前、何言ってんの？～

そんな言葉から私達は始まった。
ふさぎこんでいた私に彼が言った一言。嫌いだった、そんな彼が嫌いだった。
自分の気持ちなんか分からないくせに、偉そうに。

――――もう道なんて決まってるのよ…

そう、私が言った後だった。彼がそういったのは。

「最初っから道が決まってたら、生きてるっていわねぇだろ。」

彼はそういった、だが、私にとってその言葉は憎らしいだけだった。

「貴方は私じゃない！毎日友達と遊んで、悩みなんか無い貴方に・・・わかるわけ無いでしょ！！」

気が付けば私は彼にそう怒鳴りつけていた。人気があって、誰からも慕われるそんな彼が嫉ましかった、
羨ましかった。それと同時に自分には無いものをもっている彼に憧れていた。

「貴方は・・・貴方は私じゃない・・・」
「お前は俺の事わかんのかよ。」
「え？」
「さっき、俺に悩みなんてねぇって言ったよな、どうしてんなこと

わかんだよ。」
「そんなの、普段の貴方を見てれば・・・」
「そんなんでわかったら、お前は天才だよ。俺だって悩みくらいあるって。」

彼は自嘲気味に言った。
彼に悩みがある？　そんなことがあるのだろうか、私は信じられなかった。
だって彼は人気があって、誰からも慕われて、誰からも頼りにされて、そんな彼が・・・

「誰だって人には言えねぇ悩みがあんだよ、お前だけじゃねぇ。」
「それは・・・そうだけど・・・」
「わかったなら、とっとと帰れ。もう下校時間とっくにすぎてっぞ。」
「あ！」

そういうと彼は私の手を引き教室から出て行こうとする。

「なぁ、お前、鮎川だろ？　鮎川美帆。」
「う、うん・・・。」
「鮎川って呼んでいいか？」
「もちろん・・・！」
「俺は、神城夕・・・って、言っても俺達同じクラスなんだけどな」
「し、知ってる！神城君はクラスの人気者で、いっつも頼りにされてて、それで、それで・・・」

私は彼のいい所を必死に言っていた。そんな私を見て彼は可笑しく笑った。
それは私が今まで見たことの無いような笑顔で、そのとき私は人は

こんなに笑えるんだと知った。

「っく、ぷはっ、鮎川、んな真剣に言うなよォ！」
「え、あ、えぇっ！」
「俺ってんな有名人？」
「いや、その・・・」

彼は、そういって笑った。
彼は私の名前を覚えていた。こんな目立たなくて冴えない私の名を、
彼はちゃんと覚えていてくれた。
彼は周りを見ていたんだ、ちゃんとわかっていてくれたんだ。
私の存在、知っていてくれたんだ。

「鮎川ァ！そんじゃまた明日なァ！」

私のほうを見ながら手を振り後ろを向きながら走っていく。
私も手を振り返してみた。

「また、明日、か・・・」

つながれた手を見ながら私は頬を染めた。
これが恋なのか。

プロローグ終

## ～第1章～「賭け」

朝、私はいつもの通学路を歩いていた。
変らない風景、変らない空気、今、私が歩いている道は全て変っていないものばかり。
それでも1つ変ったものがあった。私の心、通学路がこんなに嬉しいことなんて無かった。
学校に行くのがこんなに楽しみな日は無かった。
私の心だけが、その場で違っていた。いつの間にか学校についていて、いつもどうり教室へ入った。

「おぉ！鮎川！はよっ！」
「お、おはよう。」

朝一に声を掛けられた。
それは誰でもない彼で、そのことがまた嬉しくて。
顔の綻びが隠せていなかっただろう。

「おい、夕ってアイツと仲良かったっけ・・・？」
「ん？・・・まーなぁ」

いつもどうり席に着く。友達が話しかけてくるでもない、第一友達は居ない。
でも、それでもどこか嬉しくて、1人なんてもの気が付いていなかったのかもしれない。
クラスの女子達はガールズトークで花を咲かせている。自分は入れないけど、話の内容が女の子らしくて好きだ。今日も盛り上がっているグループの話が聞こえた。

「ねぇ、あのこでしょ？雄太たちが賭けるって子。」
「えっと・・・名前なんだっけ、あの子影薄いから。」
「鮎川・・・美帆だっけ？」

私の名前が出た。賭けるって・・・何を賭けるつもりなんだろう。
でも、名前が出た以上は無関係ではないはず、また、良くないことでも起こるのかな。
そんなことが頭に浮かんだ。

「雄太たちも物好きだねぇ、あんな子。」
「でもさ、今朝神城君と挨拶交わしてたよね！？」
「二人とも仲良かったけ？」

そのことを聞くと自然と顔が綻んだ。
私も神城くんと友達になれたんだって、そう思えた。
でも、そんな甘い考えが次の瞬間全て崩れた。

「ばっかねぇ、神城君も雄太たちの賭けに入ってんだってぇ～！」
「えぇっ！嘘ー！神城君そんなことすんのぉ！？」
「マジで！？あの神城君が？」

神城君、彼の名前が出た。
彼も何かをかけている、それも私が関係していて、その賭けは私のとってきっと
辛いものなんだろうそう、わかった。

「最初に鮎川さんとキスできたら勝ちだって。」
「はぁー！？なにそれ！」
「ちょ、声でかいって！」
「んで、勝ったら、持ち金の半分みんなから貰うんだって、にして

も馬鹿だろ。」
「まァ、雄太くんらしいっちゃらしいんだけどね。ほら、最近彼女と別れたらしいじゃん」
「飢えてるってか？あっはは～」
「鮎川さんかわいそ～、キスしたら終わりだから付合ったとしてもすぐ終わるって。」

彼女達はある程度小声で話していたけれど、それは全て聞こえていて。
そんなことより私は全てに怒れてきて、瞼が熱かった、泣きそうだった、昨日のは全て嘘だった。
昨日の出来事は、儚い夢だった、刹那の幻だった。
昨日、笑顔で手を振ったのも、今日一番に挨拶してくれたのも、全て全て幻覚だった。
あの笑顔も、本当の笑顔じゃない、私を信じ込ませる唯の作り笑い。
思わず教室を飛び出した。
どこに行くわけでもなく唯走った。誰にも見られたくない、こんな勘違いをしていた自分を。
恥しかった、今思えば当たり前の事だったんだ。彼が、あの彼が私なんかに寄って来るはずが無いことくらい、なんできずけなかった？　その思いが頭の中を占めていた。

「なんで・・・私は・・・！」

また、独り。知らない方が幸せだったのかもしれない。
朝の幸せはどこに消えたんだろう。

「うっ・・・ひっ・・・うわぁぁぁぁぁぁぁ！！」

無我夢中で走った。泣きながら走った。夢中で走ってたどり着いた

所は
屋上だった。
ふと空を見上げると、私の気持ちとは裏腹に青く澄んでいた。
青く、どこまでも雲ひとつ無い青い空。
それが妙に腹立たしい。

「くっ・・・もう、嫌だ・・・」

「信じてた。・・・信じてた。・・・・・・信じてたぁ・・・」

なのに、なのに、私は裏切られた。もう誰も、信じられない・・・。

「あんた、何してるんだ、こんな所で。」
「うえ?・・・あっ!」

私は両手で涙を拭いたでも、泣いていたのはとっくにばれているわけで。

「? 泣いていたのか?」
「いえっ!・・・目が痛かっただけで・・・」
「そんなありきたりな言い訳が通用すると思うか、ばか。」
「ば、バカって!何ですかイキナリ!」
「はぁ・・・面倒な奴だ、ここ空けるから泣いていろばか。」
「バカバカ言わないでください・・・」

そういって見知らぬ人が出て行った。
独りになった私は、黙って空を見続けた。
何をしても空は変らない、雲がかかって雨が降り出しても、雲の上にはこの青空が広がっている。
夜は太陽の変わりに月が出る。そうしてまた朝になり青い空が現れ

る。

空は変らない、何千年もの間姿を変えずに私達の上にある。

これからもずっと。時代とともに世界は変ってきた。でも、空は変らないそんな空を私は信じた。

## ～第1章～「賭け」（後書き）

何か最後のほう意味わかんない方もいらっしゃると思います・・・

## 「嘘＝真実」

私が屋上で空を見上げている時、誰かが上がってくる音が聞こえた。
走っているようで、足音が速い。
ドアがガチャっと勢い良く空いたかと思えば、誰かが私に向かって走ってくる、彼だった。

「鮎川ッ！」
「ッ！　・・・・な、何！来ないでよ！！」
「え？！　・・・・鮎川、お前まさか！　・・・・やめろ、早まるな！」
「え？　ちょ・・・・キャ！」

彼は私のところへ突進してくるかのような勢いで来る。
反射的に後ずさりしてしまうが、それすら儘ならないうちに引き寄せられる。

「何考えてんだよ！　あぶねーじゃん！！」
「か、神城くん・・・・？」
「ばっか！　お前、まさか飛び降りようなんて考えてたんじゃねぇーだろうな！？」
「ち、違う、けど・・・・けど！　は、は、放してぇ！！」

私は彼に抱きしめられている状況で、一瞬何が起こったかわからなかったが状況を理解すると
徐々に顔が熱くなって、思わず彼を突き飛ばした

「ってぇ・・・・鮎川ぁ、お前なぁ・・・・」
「あ！　ごめんなさい！！　あぁ・・・・ケガとかしてない！？」
「あ、あぁ、大丈夫だ。ったくいきなり突き飛ばすなよォ。」

そういってゆっくり立ち上がる、そして頭を空きながらそっぽ向いて「悪かったな・・・」
と一言言った。

「え？　どうして？」
「その、さっきは。ビックリしたよな。」
「あ、ううん。ごめんなさいは私のほうだよ！　いきなり突き飛ばしちゃったし・・・」
「あん時は俺も必死でさ、お前が、飛び降りるのかと思って・・・」

そうだったんだ、彼は私を心配してくれたんだ・・・それで、あんなに必死に・・・
嬉しかった。とても。でも、その喜びも一瞬にして消え去った。
さっきの事を思い出せば、これも演技だとしか思えなくなる。
私は静かに彼の傍から一歩、二歩と距離を遠ざける。

「ん？　鮎川？」
「何しに・・・・・・」
「え？」
「何しにここに来たの・・・！？」
「何だよ、いきなり？」
「なんで、そんな嘘つくの？」
「え？嘘って何だよ・・・？」

あくまで白を切るつもりの彼に私は苛立ちを感じた。
嘘ならうそと言ってほしい、本当はお前なんでどうでもいいって、
助けたんじゃないって、
そうやって明るく接してくれるのも嫌だ、優しい言葉で期待をさせないでほしい。

もう、嘘を付かれるのが嫌だ。

「・・・くっ！　もう嘘だって言ってよ！　全部嘘だって！　唯の‘賭け’だって言ってよ！！」

「っ！！　・・・お前それどこで！？」

このとき私はあぁやっぱり嘘なんだと思った。
嘘だとはっきり言ってほしかったのに、なんだろう。
私は・・・本当は、嘘だといわれたくなかったのだろうか。
そう思えば思うほど涙が溢れてともらなかった。

「・・・フフッ・・・やっぱり、そうなんだっ・・・」

「鮎川、違う！　それは！」

「いいょ・・・もう、ホントに嘘だってわかったから、もう・・・！」

「あゆ、かわ・・・」

「ごめんね、私気付いたらお終いなんだよね？　ごめん、この賭けは呆気ないね、ごめんね。本当に、ごめん。・・・・それと、もう私にかまわないで・・・？」

私は最後に笑って彼の元から去った。彼は何か言いたそうな顔をしていたけど
私はそれにかまうことが出来なかった。今すぐここからいなくなりたい、彼と顔を合わせているのが辛い、わかっていた。たやすく人を信じてはいけない、今までだってそうやって生きてきたのに。
何故私は・・・・・・叶わないものに手を出してしまったのだろうか。
私は如何して・・・・・・・・・・

叶わない恋をしてしまったのだろうか。

## 「本当の気持ち」

「鮎川さん？」
「・・・はい、何ですか。」
彼の元から逃げ出して、廊下を歩いていると誰かに呼ばれた。
「・・・あの、何ですか、用が無いなら行きますけど。」
「ちょ、待て。・・・サボり？」
「・・・・・簡潔に言えばそうなりますね。」
「へぇ、鮎川さんって、そーゆー人だったの？　意外ぃー。」
私はその人にそっけなく言葉を返した。
相手はニコニコしながら私を見ていて、明らかに何かを狙っているようだった。
「ねぇ、鮎川さん。今から僕に付合ってくれないかなぁ？」
「・・・・・遠慮します。これから私はやることがあるので。」
「つれないなぁ、いいでしょ？　ちょっとだけだからさ。ね？」
その場から立ち去ろうとする私しつこくよってくる。
そんな彼に少し苛立ちながらも、上手く彼の誘いを断っていた。
「用はそれだけですか？　それじゃ、そろそろ行きますね。」
「・・・ククッ、ほーんと、おもしろいね。君。・・・夕が気に入るのもわからなく無いかも・・・」
「！！」
ぼそりと言われた一言だったが確かに聞こえた。「夕」と。

「君、夕のこと好きなんでしょ。・・・・こりゃ、夕の勝かもねぇ。」
「貴方も、その勝負してんの？」
「ん？　・・・あれれぇ～、もしかしてもう終わっちゃった？」
「さっきね。もういいでしょ？」
「じゃあ、君が夕を振ったの？　あの夕をねぇ・・・今回結構マジだったみたいだけど。」
「なに、どういうこと？」
「お、そんじゃ僕、これから用があるから行くねぇ～。」

彼は言いたいことだけ言うと去って行った。
意味ありげな事を言っていた、それに、彼の顔は新しい玩具を見つけたかのような無邪気な顔をしていた。でも、目が笑っていなかった。

「ねぇ、嘘の反対は真実だよ。」
「え？」
「嘘と真実は紙一重・・・ばいばーい」
「え、ちょ・・・」

嘘と真実は紙一重。彼はこんな言葉を残していった。

「何でだろ・・・」

彼はおかしなことを言っていた。賭けが終わったのは私が嘘だと気が付いたから。
でも、彼は私が神城君を振ったといっていた。
どちらかと言えば、振られたのは私ではないか、彼は何故そんなことを言ったのだろう。
そのことについては詳しく教えてくれなかったし、何より神城君が

本気だった、と言った事だ。
そんなにこの賭けに、賭けていたのか。私はそう思った。だが、それと同時に思ってはいけない事を思ってしまった。
もしかしたら彼は、私の事を・・・・・・だなんて、馬鹿げてる。
今さっき決めたばかりだというのに、誰も信じないと。
でも、こんな事思うなんて私も相当末期だろう。

「バカみたい・・・・」

私が発した言葉は誰もいない廊下に静かに消えた。

「鮎川・・・」
「っ！？　・・・・・・・・・か、神城君？」
「鮎川、あのさ、その！」
「関わらないでって言ったのに・・・どうして。」
「俺、鮎川にその・・・わりぃ事しちまったから・・・」

彼がうつむきながら私に言う。その姿を見て私は笑顔で返答した。

「何を？」

その返答に彼は目を見開いた。
確かにこんな事笑顔で言わない、ただなんだろう、彼を困らせたかったのかもしれない。

「何って・・・お前を、賭けに使ったこと・・・」
「・・・で、それで私に何を？」
「謝ろうと思って・・・悪かった。」
「そう、そんなの良かったのに。態々ありがと。神城君。」
「あ、何だ？」

「1時限目からさぼらしちゃってゴメンなさい。」
「！　な、何言ってんだよ！　何でお前が謝るんだよ！」
「私、これから職員室に行って早退届出してくるから、それじゃ。」
彼はしばらく私を見ていたが、私から目を伏せそうか、とひとこと言うと私と反対方向に歩いていった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4348i/

---

私達の道〜選ぶ道は...〜

2011年1月8日02時29分発行